

社会福祉法人楽山会
椎の実子供の家 地域交流スペース
令和6年度 事業報告書

1 しいのみハウスの運営（3年目）

当法人の地域公益活動として、日本財団の「子ども第三の居場所」コミュニティモデル運営助成（3年間）を受けて、令和4年11月に、地域交流スペースに「しいのみハウス」を開設してから3年が経過した。「みんなが、みんなの子どもを育てる社会」を目指して、ここを拠点に、誰一人取り残さない地域子育てコミュニティをつくることで、多世代が交流しながら、子どもたちの生き抜く力を育む「第三の居場所」を運営してきた。また、行政、社会福祉法人、NPO、市民、企業の方々との連携・協力関係の構築に努めてきた。

地域交流スペースとエントランス（約100㎡）のほかに、令和5年度から、活動の場を星の館（約70㎡）や近隣の体験農園（約1,000㎡）にも広げたことにより、充実した体験活動に取り組めるようになった。

令和6年度からは、家庭で不要になった子どもの衣類などのリユース事業「0円マルシェ」を開始した。また、フードバンク活動や地域食堂（子ども食堂）にも、三鷹市社会福祉協議会、社会福祉法人にじの会、社会福祉法人ことぶき会と当法人との連携事業として取り組んだ。

2 目標と実績

子どもの好奇心や意欲を向上するような体験活動を子どもたちの意見を聴きながら日常的に計画し、実行しており、多様な体験の機会が提供できている。

近隣の学校、学童保育所、地域子どもクラブ、社会福祉協議会、行政機関、諸団体と幅広く連携してきた。子どもたちの利用が多数あるのは、広く保護者や地域住民に認知されてきたためと考えられる。子どもの居場所が保育園に併設されていることから、安心感をもって利用している親子（未就学児）も多い。

（1）利用児童数

開設当初から一日平均利用児童数を15名以上とすることを目標にして達成してきたが、令和7年3月31日時点では20名以上を目標としたところ、13名と若干減った。減少した理由は、年度当初に十分な周知活動や利用を促す取り組みが行えなかったことで、やや伸び悩んだと考えられる。

利用児童	令和4年度利用者数 (登録者数)	令和5年度利用者数 (登録者数)	令和6年度利用者数 (登録者数)
未就学児	7人 (21人)	3人 (35人)	2人 (64人)
小学生	9人 (59人)	12人 (170人)	11人 (216人)
中学生		1人 (3人)	
計	16人 (80人)	16人 (208人)	13人 (280人)

これまでは小学校低学年の女子の利用が多い傾向にあったが、当年度は小学校3年生以上の男子の利用も多くなった。

子どもたちの活動グループでは、駄菓子屋部、畑部、美術部、科学部、手芸部などが現在活動している。

(2) 参加者の状況

ア サービス提供の役割を持つようになった人（運営参画者）の数は、減少傾向にある。特に大学生・留学生の参加が減少している。運営参画者の登録数7人（令和5年度26人）、令和6年度末実活動者数約5人（令和5年度末11人）となっている。単なるお手伝いでなく、企画、実行の役割をもって活動していただき、多世代・多文化交流機会を提供している。

このほかに当年度から三鷹市立第七中学校のボランティア部の生徒が大勢参加してくれるようになったのが、喜ばしいことであった。

イ 子どもに関する保護者からの相談件数は、27件あった。

ウ 利用者・参画者の満足度は、80%以上を目標とした。アンケート調査を令和7年3～4月に実施したところ、次のような回答を得た。

- ・子どもたち（17人）の満足度： 大好き 82% ・まあまあ好き 18%
- ・保護者（32人）の満足度： 大変満足 81%・満足 19%
- ・運営参画者（6人）の満足度： 大変満足 17%・満足 83%

3 活動の特徴

当法人運営の椎の実子供の家、近隣小学校学童保育所、地域子どもクラブと連携を取り、乳幼児から小学生までの切れ目のない日常的、継続的支援の場として、子どもたちに多様な体験機会を提供している。

(1) 多世代が交流する居場所

子どもたちが地域のボランティアなどの多世代と交流して、多様な体験をすることで、人と係る力、好奇心、学習意欲、自己肯定感を高めることに寄与している。また、課題のある子どもの早期発見や見守りを行ってきた。

(2) 多文化との触れ合いの場

国際基督教大学の学生やミドルベリー大学の留学生、第七中学校の生徒、地域住人ボランティアとの関係を構築し、多世代交流・多文化交流の機会を提供してきた。子どもの居場所での実習が国際基督教大学の授業として認定されるので、大学生・留学生が定期的に参加していることも子どもたちのよい刺激になっている。

(3) 地域の交流の場

地域の方が気軽に立ち寄れる居場所となることを目指して、「椎の実カフェ」を運営している。子どもの居場所「しいのみハウス」の活動前の時間帯に、子育て中の母親、地域の方がリラックスできるプログラムを提供し、相互交流の機会を創出してきた。

4 事業内容

(1) 定員

「しいのみハウス」の利用定員は、乳幼児から小中学生までの30名。家庭や自身に課題を抱えた子どもたちだけでなく、分けへだてない利用を促進することとして、一日平均20名の子ども利用を見込んで運営した。

(2) 開所時間

月～金の週5日開所（祝日は休館）

- ・「しいのみハウス」：14時～18時
- ・「椎の実子カフェ」：11時～14時

(3) 活動内容

ア 「しいのみハウス」の運営（14時～18時）

多地域交流スペースでは、食事・交流・学習・体験活動スペース、シェアキッチン、駄菓子屋コーナー、地域情報コーナー、リユースコーナーなどの活動の充実を図った。

ここでは、乳幼児から小中学生までの切れ目のない日常的・継続的支援の場として、多世代が交流する居場所づくりを行っている。子どもたちに多様な体験の機会を提供し、多世代・多文化との交流を通して、人と係る力、好奇心、学習意欲、自己肯定感、自己有用感を高めるとともに、子どもとの1対1の関係を重視しながら、課題のあるこどもの早期発見や見守り支援を行った。

また、子どもたちやボランティアスタッフの提案を取り入れた体験活動を大切にして、子どもたちの生活習慣の形成や意欲向上に取り組んだ。具体的には、次のような活動を実施した。

- ① 多世代・多文化交流体験活動・・・国際基督教大学の学生やミドルベリー大学の留学生、地域ボランティアとのゲームやコミュニケーション遊び
- ② 生活体験活動・・・調理体験・おやつ食堂
- ③ 表現活動・・・美術講師による様々なアート体験
- ④ 自然体験活動・・・体験農園
- ⑤ 探求活動・・・科学実験
- ⑥ 地域ふれあい活動・・・地元そば店の協力によるうどん打ち体験
- ⑦ アントレプレナーシップ・・・駄菓子屋、八百屋の開店
- ⑧ 接続期交流プログラム・・・就学前の保育園児と小学生との交流など

野外活動として、令和5年の秋から実施している体験農園活動では、夏秋冬野菜の植付け、管理作業、収穫、販売の一連の作業を子どもたちが体験した。男児には穴掘りの人気が高かった。

また、令和5年8月から実施してきた駄菓子屋活動は、毎週1回継続して実施し、子どもたちから大変好評を得ている。

令和6年度の新規事業として、次4つの事業に取り組んだ。

- ① 「フードバンクみたか」と連携して、「まんぷくBOX」を施設内に設置し、地域からの食品の収集に取り組んだ。集まった食品は社会福

- ② 大学生や留学生、中学生、地域の高齢者のボランティアとの交流機会を積極的に設けたことにより、年齢や立場を越えた「斜めの関係」の中で、子どもたちが安心して自己発揮をする姿がみられた。

また、第七中学校ボランティア部の中学生の参加は、小学生にとっての身近なロールモデルとして、憧れや将来への期待を抱く機会となり、中学生にとっては自己肯定感の向上の機会となった。

- ③ 自然に触れる環境教育を通じて、土づくり体験、野菜の栽培・収穫体験などの活動を積極的に取り入れ、子どもたちが自然の中で自らの手を動かし、五感を通じて学ぶ機会を創出した。

また、体験農園では近隣農家や地域住民と一緒に作業する機会を設け、多世代による交流を通して、社会の中での自己を感じ、大切にされていることを実感することができた。

さらに、地域資源を活かした体験活動として、近隣のそば店の協力を得て、昔ながらのうどんの打ち方を学ぶ機会を設けた。単なる調理体験にとどまらず、地元の食文化に触れることで、自分の育った地域への愛着を深めることができた。

- ④ 駄菓子屋運営やジュニアボランティア活動などのアクティブラーニングプログラム（能動的学習活動）を実践したことにより、子ども自身の自己肯定感や自己有用感の向上が見られた。